

# 現代イギリスにおけるヘンデルの位置

—2005年「プロムズ・ラストナイト・コンサート」からの考察

高 際 澄 雄

## 序

イギリスの文化を論ずる場合、日本の研究界では音楽の重要性にあまり注意が払われていないことは、すでに論じたが、ここではイギリス音楽を代表するヘンデルが、現代にどのような位置を占めているのか、代表的な音楽行事であるBBCの番組、2005年「プロムズ・ラストナイト・コンサート」<sup>2</sup>を手がかりに考察したい。

2005年の「プロムズ・ラストナイト・コンサート」には新しい企画が加わった。それまで演奏会場がロイヤル・アルバート・ホールで、野外会場としてハイド・パークに大型スクリーンが設置されて、会場の様子を映し出すという形式をとっていたが、2005年には、さらにマンチェスターのヒートン・パーク、スウォンジューのシングルトン・パーク、ベルファーストの市庁舎前広場、グラスゴウのグラスゴウ・グリーンに会場が設けられ、5会場でも部分的に演奏が行われた。つまり、プログラムの第9番、サー・ヘンリー・ウッドの「イギリスの海の歌による幻想曲」の前奏部分で、5会場から金管楽器による軍楽の演奏があったほか、プログラムの第10番で、イギリスを構成する4民族の代表的民謡が合唱によって歌われたのである。

この新しい企画が、「プロムズ・ラストナイト・コンサート」をそれまでのイングランド中心の行事から、イギリス全域の行事に変えたことは疑いがない。というものの、このコンサートの最後から2番目に歌われる「エルサレム」は、美しい曲であるにもかかわらず、イングランドを新しいエルサレムに変える、と歌っているために、これまでのようにロイヤル・アルバート・ホールやハイド・パークで演奏会を行っている、どうしてもイングランド中心の行事と映ってしまうからである。会場をイギリスの各地域に設置することで、イングランド中心の印象をイギリス全域の行事へのもものと変化させたのである。

それでは、この新しい企画の中で、ヘンデルはどのような位置を占めているのだろうか。以下に見ていきたい。

## 第1節 プログラムの構成

2005年度の「プロムズ・ラストナイト・コンサート」のプログラムはつぎのよう  
に構成されている。

### 第1部

- 1 ウォールトン作曲 序曲「ポーツマス・ポイント」(ポール・ダニエル指揮  
BBC交響楽団)
- 2 ヘンデル作曲アリア
  - ・『クセルクセス』よりアリア「うるわしい木陰よ」
  - ・『ロデリンダ』よりアリア「いとしい人はどこに」
  - ・『ユスティノス』よりアリア「わが心のうちを語らば」(アンドレアス・ショル (カウンター・テナー) ポール・ダニエル指揮  
BBC交響楽団)
- 3 ロドリゴ作曲「アランフエス協奏曲」  
(ジョン・ウィリアムズ (ギター) ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団)
- 4 ランバート作曲 「リオ・グランデ」  
(BBCシンガーズ BBC合唱団 ポール・ルイス (ピアノ)  
カレン・カーギル (メゾソプラノ) ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団)

### 第2部

#### 【サー・ヘンリー・ウッドの胸像への月桂冠の献呈】

- 5 コンゴルト「シー・ホーク」組曲  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団)
- 【ポール・ダニエル演説】
- 6 ベンブリッジ作曲「スケルツォ」  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団)
- 7 歌曲
  - ・アイルランド民謡「サリー・ガーデン」  
(アンドレア・ショル(カウンター・テナー) ジョン・ウィリアムズ (ギター))
  - ・パーセル作曲『アーサー王』よりアリア「いと美しき島」

- (アンドレア・シヨル (カウンター・テナー) ジョン・ウィリアムズ(ギター)  
BBCシンガーズ ポール・ウィリアムズ指揮 BBC交響楽団)
- 8 エルガー作曲「威風堂々」第1番  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団 合唱に聴衆参加)
- 9 ウッド作曲「イギリスの海の歌による幻想曲」  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団 5つの公園での演奏加わる)
- 10 各地の民謡
  - ・ウェールズ民謡「夜もすがら」(スウォンジーの合唱団と管弦楽団)
  - ・スコットランド民謡「スカイボートソング」(グラスゴーの合唱団と管弦楽団)
  - ・アイルランド民謡「ロンドンデリーの歌」(ベルファーストの合唱団と管弦楽団)
  - ・イングランド民謡「埴生の宿」(BBC交響楽団のオーボエ奏者)
- 11 ヘンデル作曲『マカベウスのユダ』より「見よ、勇者は帰りぬ」管弦楽版  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団)
- 12 アーン作曲「ルール・ブリタニア」  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団 BBCシンガーズ BBC合唱団 合唱  
には観客参加)  
【ポール・ダニエル演説】
- 13 パリー作曲「エルサレム」  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団 BBCシンガーズ BBC合唱団 合唱  
に観客参加)
- 14 イギリス国歌  
(ポール・ダニエル指揮 BBC交響楽団 BBCシンガーズ BBC合唱団 合唱  
に観客参加)
- 15 スコットランド民謡「蛍の光」(観客のみ)

以上の曲目をみると、外国の作曲家は「アランフェス協奏曲」のロドリーゴと「シー・ホーク組曲」のコンゴルトの2人であり、他はすべてイギリスの作曲家の曲で構成されている。

イギリスの曲の内容はどうであろうか。曲は20世紀に作曲されたものが多い。ウォルトンの「ポーツマス・ポイント」、ランバートの「リオ・グランデ」、エ

ルガーの「威風堂々」、ウッ드의「イギリスの海の歌による幻想曲」、ベインブリッジの「スケルツォ」、パリーの「エルサレム」であり、6曲に上る。一方、古いものでは、ヘンデルのアリア3曲、アイルランド民謡「サリー・ガーデン」、パーセルの「いとも美しき島」、ウェールズ民謡「夜もすがら」、スコットランド民謡「スカイ・ボート・ソング」、アイルランド民謡「ロンドンデリーの歌」、イングランド民謡「埴生の宿」、ヘンデルの「見よ、勇者は帰りぬ」、アーンの「ルール・ブリタニア」、イギリス国家、アイルランド民謡「蛍の光」とほぼ歌曲を中心として14曲である。

このようにして、プログラムの構成から言えば、ある程度外国の曲に配慮している——ロドリゴの「アランフェス協奏曲」は明らかにスペイン的であり、ランバートはイギリスの作曲家ながら、合唱の内容はブラジルを歌っている——とはいえ、基本的にイギリスの曲を中心に構成されており、そのイギリスは現代的な曲と古い曲がバランスよく組み合わせられていて、解説者が言うように、「極めてイギリス的だ」ということができるだろう。

## 第2節 ヘンデルの曲

「プロムズ・ラストナイト・コンサート」では、必ずヘンデル作曲の『マカベウスのユダ』を演奏しているが、この曲はアーンの『ルール・ブリタニア』と並んで、極めてイギリス人の愛国心を刺激する曲である。それは、『マカベウスのユダ』が作曲された時代の事情に端を発している。

1745年、フランスに亡命していたスチュアート家の王子、チャールズ・スチュアートが王位を奪還するためにスコットランドに上陸し、スコットランドの高地地方の貴族の支持を得て、ダービーまで南下し、ロンドンの人々を恐怖に陥れた。これに対して、ハノーヴァー家は王位を守るために、カンバーランド公爵を指揮官にした軍隊を送り、やがて弱小の反乱軍をうち破る。チャールズ・スチュアートはスコットランドに追い返され、1746年4月16日、エディンバラ東のカロデン・ムーアで、チャールズ・スチュアートの反乱軍は決定的に敗北する。これに対して、カンバーランド公爵は、反乱軍を許さず、負傷者を見つけては殺害するという方法で徹底的に鎮圧した。このためカンバーランド公爵は「屠殺屋」の異名を得たほどであった。

ロンドンの平安はこのようにして回復した。この状況に便乗したのがヘンデルであった。旧約聖書『マカベア書』から、ユダヤ民族の独立を回復した物語を取り、その反乱軍の指導者、マカベウスのユダをカンバーランド公爵になぞらえて、歌劇『マカベウスのユダ』を作曲、公演したのであった。この曲は、ヘンデルの生涯の中でも、まれにみる人気を博し、とくに「見よ、勇者は帰りぬ」は、カンバーランド公爵率いる討伐軍の帰還を讃える歌となったのである。

こうして、「プロムズ」においてヘンデルはイギリスの国威発揚の作曲者として使われていることがわかる。これは「プロムズ」の成立と関係があるだろう。この音楽祭が最初に企画されたのが、1895年であり、大英帝国が健在だった時期である。したがって、帝国主義的・植民地主義的考えが生きていたのであり、ここから考えれば、エルガーの「威風堂々」で、国境の拡張が賞賛されたり、アーンの「ルール・ブリタニア」で7つの海の支配が正当化される根拠があった訳になる。国内的にも、イングランド中心で「エルサレム」が歌われたということができよう。ヘンデルの「見よ、勇者は帰りぬ」もこの流れに沿った曲だったのである。

だが、今年にはヘンデルの別の側面が強調された。それは、ヘンデルの歌劇から取られたアリアが歌われたことである。解説者が何度も強調していたが、「プロムズ・ラストナイト・コンサート」にカウンターテナーが登場したのは、始めてのことだった。しかもこの歌手、アンドレアス・ショルは、ラストナイト・コンサートにはじめて出演したドイツ人歌手だという。これはまさにヘンデルの存在の複雑さを表している。

ヘンデルの生まれは、ドイツ・ザクセン地方のハレであった。したがって、彼は、生まれから言えば、ドイツ人だった。しかし、21才の時にイタリアに渡り、1709年にベネチアで『アグリッピーナ』により大成功を収め、ハノーヴァー家に仕えてからは、活動拠点をロンドンに移し、1711年に『リナルド』で再び大成功を収めてからは、1712年にロンドンに居を移して、以後、没するまでロンドンで音楽活動を行った。1727年にはイギリスに帰化している。

しかしながら、ヘンデルの英語にはドイツ訛が残っていたところから、イギリス人には奇異の目で見られることもあった<sup>3</sup>。それに、ドイツ人がヘンデルの曲を好んでおり、ドイツでは今でもドイツの作曲家として考えられ、演奏され続け

ている。

しかも、彼が1711年から1740年にかけて書いた作品の多くが、イタリア語による歌劇であったことも、問題を複雑にしている。ヘンデルが英語によるオラトリオに専念するのは、1740年代になってからにすぎない<sup>4</sup>。

このようにして、ヘンデルは先ず国際的な音楽家として名声を得たのであり、2005年の「プロムズ・ラストナイト・コンサート」では、この側面が強調されたのだった。

### 第3節 国際的作曲家としてのヘンデル

プログラムの第2番目には、アンドレアス・ショルの独唱が配置されていた。その曲目は、すべてヘンデルの歌劇のアリアであった。ラストナイト・コンサートで初めてのドイツ人歌手、しかもイギリス人にはなじみの薄いカウンター・テナーによるイタリア語のアリア。ここに、ヘンデルを通して国際性が強調されている。

ただし、最初のアリアは、単純である。歌詞はつぎの通り。

Ombra mai fu	木陰よ
di vegetabile	この木のつくる木陰よ
cara ed amabile,	あなたほどいとおしく
soave più.	心地よく、甘美なものはない。

これが、つぎのように展開される。<sup>5</sup>

Ombra mai fu  
di vegetabile  
cara ed amabile,  
soave più.  
Ombra mai fu  
di vegetabile  
cara ed amabile,  
soave più.  
Cara ed amabile,

Ombra mai fu  
di vegetabile  
cara ed amabile,  
soave più,  
soave più.

つまり、同じ歌詞が2回繰り返されたあと、第3行が繰り返され、また全4行が繰り返されて、最後の行がもう一度繰り返される、というものである。ただし、音楽は、4行が繰り返される訳ではない。この点、この曲の複雑さと魅力があるのである。

第2曲は、歌劇『ロデリンダ』からのアリア「いとしい人はどこに」である。この歌詞も簡単である。

Dove sei, amoto bene?	どこにいるのか、いとしい人よ。
Vieni, l'alma a consolar.	おいで、そして私の心を慰めておくれ。
Sono oppresso da'tormenti	私は苦しみに悩まされ
ed i crudi miei lamenti	あなたの側でだけ
sol con te posso bear.	残酷な悲しみは軽くなる。

この歌詞は以下のように、展開される。

Dove sei, dove sei, amoto bene?  
Vieni, l'alma a conslar, a consolar.  
Bene, bene, amoto bene?  
Dove sei, amoto bene?  
Vieni, l'alma a consolar,  
vieni, vieni, l'alma a consolar.  
  
Sono oppresso da'tormenti  
ed i crudi miei lamenti

sol con te posso bear.  
Sono oppresso da' tormenti  
ed i crudi miei lamenti  
sol con te posso bear,  
sol con te passo bear.

Dove sei, amoto bene?  
Vieni, l'alma a consolar, a consolar.  
Dove sei, amoto bene?  
Bene, bene, amoto bene?  
Dove sei, dove sei,  
vieni, vieni, l'alma a consolar,  
vieni, l'alma a consolar.

ここでは、第1曲より少し複雑になっている。歌詞が2節からなり、第1節では第1行の最初の2語が繰り返され、第2行の最後の単語が繰り返される。それから最初の2行が繰り返されて、また第3行が繰り返される。繰り返される場合には、最初の語が繰り返される。第2節では、3行が2度繰り返されるのだが、最後の行がもう一度繰り返される。そして再び第1節に戻り、2行の最後の語が繰り返される。1行目の2度目の繰り返しの時には、単語が変化するが、3度目には最初の単語が2回繰り返され、そのまま、第2行に入る。そして、最初の単語が繰り返され、第2行がもう一度繰り返されて、終わる。

この形式は、ダカーポ形式と呼ばれる。つまり、2節の詩が、第1節が繰り返されることによって、3節の詩のごとくに響くのである。しかも第1節の繰り返しは、最初に歌われる時より、複雑となる。

第3曲はヘンデルの歌劇『ユスティノス』のアリア「わが心を語らば」が歌われた。この歌詞もそれほど複雑な訳ではない。

Se parla mel mio cor	もしせっかちな勇気が
Intrepido valor	私の心を通して語るならば

Voce e del Fato.                      それは運命の声。

Ne degg'io disprezzar,              私はそれを軽蔑せずに  
Ma lieto io vo'ascoltar              喜んでその喜ばしい声に  
Suono si grato.                      耳を傾けよう。

この歌詞が次のように展開される。\*は次の音節がメリスマ唱法で歌われていることを示す<sup>5</sup>。

Se parla mel mio cor

Se parla mel mio cor

Intrepido valor

Voce e del Fato,

Voce e del \*Fato.

Se parla mel mio cor

Intrepido valor

Voce e del Fato,

Se parla mel mio cor

Se parla mel mio cor

Intrepido va\*lor

Se parla mel mio cor

Se parla mel mio cor

Intrepido valor

Se parla mel mio cor

Voce e del \*Fato,

Voce e del Fato.

Ne degg'io disprezzar,

Ne degg'io disprezzar,

Ma lieto io vo'ascoltar

Suono si grato.

Suono si grato.  
Ne degg'io disprezzar,  
Ma lieto io vo' ascoltar  
Suono si \*grato.

Se parla mel mio cor  
Se parla mel mio cor  
Intre\*rido valor  
Voce e del Fato  
Voce e del \*Fato.  
Se parla mel mio cor  
Intre\*rido valor  
Voce e del Fato  
Se parla mel mio cor  
Se parla mel mio cor  
Intre\*rido valor  
Se parla mel mio cor  
Se parla mel mio cor  
Intre\*rido valor  
Se parla mel mio cor  
Voce e del \*Fato  
Voce e del \*Fato.

このアリアはヘンデルの複雑なアリアの代表である。第1節の第1行が繰り返され、第3行が繰り返されるが、最後のFatoの母音には長く複雑な音価が与えられる。典型的なメリスマ唱法である。第1節の繰り返しは、単純に繰り返される。第1節の3度目の繰り返しには第1行が繰り返されると同時に第2行の最後の単語がメリスマ唱法で歌われる。それから第1行が繰り返され、第3行目が繰り返されるが、最後の単語は長いメリスマ唱法となる。

第2節の繰り返しは、単純であり、ただ繰り返されるだけだが、最後の単語は

メリスマ唱法となる。

第1節に戻り、1行目が繰り返され、2行目の中間の単語がメリスマ唱法で歌われる。第3行がまた繰り返されるが、最後の単語はメリスマ唱法で歌われる。つぎの繰り返しは単純である。次に第1行目が繰り返され、2行目の中間の単語がメリスマ唱法で歌われる。その後1行目に戻り、1行目が繰り返され、2行目に移り、また1行目に移って、第3行に飛び、最後の単語がメリスマ唱法で歌われ、さらに同じく繰り返され、最後に長いメリスマ唱法となる。

このように第3曲のアリアは複雑な展開を見せている。つまり、ヘンデルの音楽世界の特徴を、第1曲の単純な形式から始め、次第に複雑にして、当時の歌劇の高度な手法を示したのである。ヘンデルは、まさにこの歌唱技法の提示において、当時のイギリスのみならず、ヨーロッパ全体に名声を得ていたのである。

こうして、2005年の「プロムズ・ラストナイト・コンサート」は当時のヘンデルが持っていたヨーロッパ世界での国際性を示すことで、イギリス文化のもつ国際性をも同時に示したといえることができる。ヘンデルの偉大さは、単にイギリスに同化し、イギリス人の気に入る音楽を書いたということだけではなく、国際性に裏打ちされた国民性を提示し得たことにあり、そこに常にイギリス人の心の支えになり得ている秘密があるといってもよいだろう。

## 結尾 単純な民謡と複雑なアリアの対比

2005年の「プロムズ・ラストナイト・コンサート」では、この他に、古き伝統を表す作品として、民謡が歌われた。アンドレアス・ショルも第7番目のプログラムにもう一度出演して、こんどはアイルランド民謡「サリー・ガーデン」とパーセルの「いと美しき島」をもう一度歌った。これらの曲には、メリスマ唱法は含まれておらず、歌詞の繰り返しもない。1音節に1音が与えられるという、単純な歌唱である。一度、名人芸を披露したあとだけに、その単純で純粋な歌は心に染みる。その他、イギリス各民族の民謡も合唱団によって歌われ、その伝統が演出された。これらの民謡も、1音節に1音が与えられる単純な作曲技法によっている。

だが、ショルの歌ったパーセルの「いと美しき島」には気をつけなければならない。パーセルは、別の機会に示したように<sup>6</sup>、このように単純な音楽ばかりを

書いていたわけではない。むしろ彼は、ヘンデルにも匹敵する複雑なアリアも書き得たのである。ただ、ちょうどヘンデルの『クセルクセス』のアリアと同じように、単純で美しい曲をも書いたパーセルは、イギリスの素朴さの代表としてこの演奏会で使われたにすぎない<sup>5</sup>。

18世紀の音楽状況を調べてみればすぐに分かることだが、イギリスもイタリア、ドイツ、フランス、スペインなどの諸国と同じように、美しい音楽を数多く作り、国民はその宝庫を楽しんでいる。とりわけ、ヘンデルはその中心的存在として、愛国性と国際性の両方を代表し、パーセルとともに現代においてもイギリス音楽の創造性を表す作曲家だということができる。2005年『プロムズ・ラストナイト・コンサート』はヘンデルの国際的側面を強調することによって、イギリス音楽の普通性を主張した画期的なプログラムであった。

## 註

1. 拙論「ヘンデルの初期英語音楽劇作曲の意義ー『エイシスとガラティア』と『エステル』」(宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第52号、pp. 97-121 2003年) 参照
2. 分析は、2005年12月日にNHKBSハイビジョンでの放送に依っている。
3. ホグウッド『ヘンデル』(東京書籍、1991年) pp. 307-8を参照のこと。
4. この点については、拙論「イタリア語歌劇から英語オラトリオへーヘンデルにおける英語名品作曲の意味」(宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』第51号、pp. 95-115、2002.3) で触れた。
5. このような表記は、一見無意味に見えるかもしれないが、演奏を聴くに当たっては重要である。外国語を理解できない場合には、繰り返しの意味が分からなくなり、ただ特殊な発声の技術を誇示しているように見えてしまう。今回のNHK BSハイビジョンでの放送でも、繰り返しの部分は字幕を入れなかったが、真剣に歌を理解しようとしている聴取者には不親切であろう。
6. パーセルの歌曲の複雑さについては、拙論「パーセルの最初期祝典オードにおける詩と音楽」(『宇都宮大学国際学部研究報告』第17号、pp.77-90、2004年) を参照のこと。